

9

シンガポール

多様な遊びを楽しむ

原田 忠夫

映画大好き

シンガポールの娯楽の代表は、食べる楽しみを別にすれば、なんといっても映画。テレビやビデオあるいはその他の遊びによる娯楽の多様化で多少様子が変わり、年一五回映画を見ていた。八七年日本人は、年一・四回にしかすぎない。

とはいっても、依然として映画常設館が七〇館以上存在する。東京二三区の常設館が一七〇館で、人口六万人に一館であるのに対し、二万五〇〇〇人に一館である。第一の理由は、入場料が安い。次に近くに映画館があるうえに、一本立だから時間もとらず、気軽にいける。

料金は、通常三段階に分かれており、一階最前列から七、八列までは低額で、中学生たちは、専らここを利用する。入り口も別。それ以降は Back Seat と称して、高くなる。さらに二階席

は個室でもないのに Box Seat と称して、なおお高い。値段は、それぞれ二四〇円、四〇〇円、五六〇円。すべて指定席。

映画館には四大系列があり、シンガポールと香港の両地に本拠を置く邵氏機構 (Shaw Org.)、香港が本拠の国泰機構 (Cathay Org.)、地元の栄華機構 (Eng Wah Org.)、中僑院綫 (Oversea Movie) と、それぞれが一五、六館を経営している。前二系列が洋画と中国系 (香港、台湾映画を含む) で、後者が中国系専門である。これらの系列以外にタミール語映画等の単独館やマイナーな系列がある。

中国映画は、北京語か広東語がほとんどだが、たまに古い潮劇 (潮州語の歌舞劇) 映画などが上映されることがあると、シンガポールの華人では二番目に多い語族である潮州人のお年寄りたちは、それこそ涙を流して喜ぶ。

洋画の場合は、字幕が中国語で、中国映画の場合は、英語と中国語で出る。中国映画の中国語字幕は、映画の使用方言が分からない人たちのためである。二カ国語のために画面の三分の一が字幕という悲惨な場面もある。

なお、シンガポール製映画は、五年に一本程度有るか無しか。

余興・室内遊戯

祭りとお盆などの余興として仮設小屋で演じられるのが粵劇 (広東劇)、潮劇などの中国歌舞劇—Chinese Opera は、結構人気があるという。知人の華

人にあの歌詞や台詞が分かるのかと聞くと、半分くらいしか分からないがあの微妙な節廻しが中国人たる琴線に触れる、と言った。ジャカジャカジャカジャーンという銅羅の音と派手な衣装と隈取りが祭りの景気づけになるという効用もある。

室内遊戯では、麻雀とブリッジと中国将棋。麻雀は、家庭内か近所の皆さんとの暇つぶしで、日本での一九七〇年代の仕事の付き合い的なものではない。花牌も混ぜるが日本のように翻数を上げるためではない。ブリッジは交際の輪を広げる手段のような側面がある。中国将棋は、東南アジア華人の競技会があり、前二者とはちょっと趣が違って技を争う。

「養鳥争鳴」の楽しみ

ペットでは、小鳥。犬猫は、犬は赤犬に限るとか、虎は猫のこととかいって、食欲のほうがちがつく。

香港とか台湾の小鳥飼育は、姿かたちを楽しむのが主力。シンガポールでは、「養鳥争鳴」といって、鳴き声を楽しむ、音色の美しさと長さを争う。小鳥は、四川省産の笑いつぐみが多い。姿かたちのほうは、例えばサンバードといった眼の覚めるように綺麗な小鳥がシンガポールにはいるが、捕獲自体が禁止であるうえに、籠で飼育すれば一週間で死ぬ。その代わり鳥籠にお金をかける。竹細工の繊細で見事に凝った鳥籠に、宋まではいかなかったが、明や清の小振り磁器を水皿や餌入れに転用して贅を競う。ちなみに鳥籠のお値段は、二万円から三万円ぐらいでほとんどのものが手にはいるが、あればかりは日本に持ち帰れない。中国人街の近くにある

ティオンバル公園などで早朝、それぞれが持ち寄った鳥籠を竿に掛けて、共鳴争鳴させる。

何でも ある

スポーツと健康法

スポーツでは、英国源流のものでないものはない。日本では通常みられない Polo、クリケットも見掛ける。なかでも盛んなのは、サッカー、スカッシュ、テニス。屋内スポーツのスカッシュは、国土の狭いシンガポールでは最適と言いたいが、それよりも日焼けを嫌うのが盛んな最大理由。サッカーやテニスやゴルフでカンカン照りの真つ昼間、走り回っているのは、子供と日本人。

中国源流では、氣功類。日本で氣功という言葉が人々の口にのぼるようになったのは一九八〇年代末のことであるが、シンガポールでは、七〇年代半ばには普遍的になっていた。

同様に安上がりの健康法であるジョギングも、日本でこの言葉がポピュラーになったのは、一九七〇年代後半のことであるが、シンガポールでは、その頃はすでに老若男女が走り回っていた。日本の場合、こうしたはやり物も翻訳という手数を踏んだうえで世間に拡がるが、シンガポールの場合は、英語、中国語から直接とりこむだけ早くなる。

シンガポール独自のスポーツはないが、マレーシアで盛んな藤球、すなわちセパックラガの変形で、シンガポール華人がするチャプテックというものがある。藤球がラタンで作った球であるのに対し、チャプテックは、バドミントンの羽の化け物のようなものを使う。直径五、六センチメートルの円形の厚紙を何枚も重ね、高さも五、六センチにする、中心に鷺鳥の羽を差

し込む、最後に細ひもでしっかりくる。出来上がった羽の重さは七〇―八〇グラム。それを足をつかつて相手のコートに打ち込む。頭も使ってよいが、頭が悪くなるといって嫌い、あまり頭を使わない。ルールは、籐球と同じ。

競馬も盛ん

競馬は、イポー、ペナンの競馬と一体となって、順次開催される。シンガポールの主催は、ブキット競馬会 (Bukit Turf Club) である。競馬場は、ブキティル (思いのまま) は、欲深さが滲み出ている。Golden Chopsticks 金筷子、ゴールデン・アローでなく、金の箸というところが、シンガポールたる所以。筷 (箸) を快速の快に掛けている。競馬新聞はないが、一般紙に一ページあるいは見開きで結果をずばりといったものではないが馬の調子を中心とした予想がでる。

屋台でソバなどをすすっていると、おばさんがやって来て、「マーピャオ、マーピャオ」と、何やら宝くじ様のものをヒラヒラさせて、一ドルで買わせようとする。こんな経験をお持ちの方は多いと思うが、これは、「馬票」。正式には、「競馬籤」といって競馬結果を元にした公式の宝くじ。一等の賞金は、一万または二万Sドルで、最低は、五〇Sドル。

流行する観光旅行

最近はやるものは、なんといっても観光旅行。シンガポールドルの堅調の恩恵で、日本人同様世界中を駆けめぐっているが、やはり人気のある

のは、中国、香港、台湾。中国語、福建語が通じるところがいいようだ。近場のマレーシアでも、ペナンは、福建語が使えるためか休日のリゾートホテルはシンガポール人であふれている。ところで日本一週間のグループツアーは一七万円（一九九二年末現在）。逆に日本からのシンガポール一週間は、ほどほどコースで八万円。まったく日本では、遊びも碌にできない。シンガポールに行こう！

（はらだ　ただお／アジア経済研究所在香港海外調査員）